

ふるさとミニ百科

大山道・矢倉沢往還



ねもじり坂の入口付近

大山道は矢倉沢往還ともいい江戸城の赤坂御門から青山、三軒茶屋、二子、溝口、荏田、厚木、伊勢原を通り箱根の矢倉沢・足柄峠を越え、甲府や沼津方面へ分かれて行きます。江戸時代にそれまでの古い道をつないで作られ丹沢の大山にお参りする人たちが通るので大山道といわれました。それだけでなく東海道のわき道として、また静岡のお茶や桑野のタバコ、相模川のアユ、多摩丘陵のまきや木炭などの特産物を江戸へ運ぶ道として利用されました。

大石橋上流（ニヶ領用水）

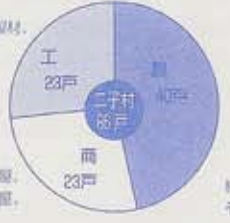


ニヶ領用水

稲毛領と川崎領（現在の川崎市と横浜市の一部）ニヶ領の農地に水を引くため江戸時代初めに建設されたのがニヶ領用水です。徳川家康の命令で、代官小泉次大夫が農民たちを指揮し、15年もの難工事の末、慶長16年に完成させたものです。この用水のおかげでお米がたくさんとれるようになりました。また、農業だけでなく、野菜を洗ったり、お米をといったり、お風呂の水にしたりと、生活になくてはならない水でした。

人々の職業

館治屋、大工、製材、石工、染物屋、橋屋、豆腐屋、餅屋



買屋、米屋、小間物屋、あらしの屋、居酒屋、炭屋、古道具屋



明治の初め頃の記録によると二子村には86戸、溝口村には110戸の家がありました。約半数は農家ですが、当時の人々の暮らしを伝えるさまざまな職業が見られます。

おお やま みち
大山道
歴史ウォッチング
ガイド



川崎市大山街道ふるさと館

大山道歴史マップ

二子の渡し

大山道を通り江戸へ出かける人たちは二子で多摩川を渡らなければなりません。二子に橋ができたのは大正14年(1925)です。それまでは水が少なくなると橋を作りましたが、正式な橋はなく、人々は渡し舟を利用していました。馬や荷車も船に乗って川を渡りました。この渡し舟は江戸時代中期から大正時代まで、二子村と向こう岸の瀬田村が村の仕事としておこなっていました。普通は渡し賃を払いましたが武士は無料だったそうです。



二子の渡し(大正8年頃)

多摩川の筏流しと砂利採掘

江戸時代から多摩川には、上流の青梅・五日市などの山から切り出した材木のいかだがたくさん流れました。藤づるで組まれたいかだは、いかだ乗りがあやつり何日もかかって多摩川を下り、二子や六郷などのいかだ場で材木屋に渡されました。

大正中期から昭和のはじめ頃まで川の中の砂利採掘がさかんにおこなわれていました。その結果、砂利を掘り過ぎ、昭和9年には川を守るために砂利採掘が禁止されたのです。それ以前は、関東大震災後の東京の復興で、砂利がたくさん必要とされた時期でした。多摩川は東京に近い砂利の産地として業者が殺到し、多くの人を使って砂利を掘り、船底の平らな砂利船で河口へ運んでいきました。

後には砂利運びのために鉄道も敷かれます。新玉川線の前身である玉川電気鉄道や南武線ももともとは多摩川の砂利を運ぶ鉄道でした。

山開きと大山灯籠

雨乞いの神様として知られる大山は古くから人々の信仰を集め、江戸時代には村ごとに「講」という信者のグループができました。街道沿いの村の講では村内の決まった場所に木の灯籠を立て、毎年7月26日の山開きから8月17日の閉山まで毎晩欠かさず火をともしました。大山参りの講の人たちはスゲ笠、浴衣にわらじ姿で腰に鈴をつけ「散華散華 六根 清浄 大山尊大権現」と唱えながら歩き「ビッキヨクレ」と追いかける近所の子もたちに、小銭を投げ与えたそうです。

光明寺と二子学舎

戦国時代、戦いに敗れた武田の家臣がおちのびてきて、やがて浄土真宗の教上人の弟子となって開いたといわれる光明寺。もとは二子塚にありましたが、多摩川の洪水に悩まされたので、江戸時代に矢倉沢往還が整えられた時、周辺の住民とともに道沿いの現在地に移りました。それが二子村の起こりになったといわれます。明治になって初めて学校ができた時、ここの本堂がそれにあてられ「二子学舎」と呼ばれました。境内には岡本かの子の兄・雪之助の墓があります。また、前方の大貫病院は「岡本かの子」の生家でもありました。(今は無い)

蔵造りの店(タナカヤ呉服店)



タナカヤ呉服店は明治44年に建てられたとても古いお店です。瓦屋根に土壁、太い柱、東側に土蔵を持つ「蔵造り」といわれる建て方で、釘を使わずほぞという凹凸の組み合わせで材木を組んでいます。昔、隣からの火事で全部焼けてしまった経験から、燃えにくい蔵造りにしたそうです。また、泥棒が入れないように窓には格子がはめ込まれています。当時としてはぜいたくなつくりで、珍しい扇垂木造りの出窓がある貴重な建物です。

江戸時代の薬屋

大山道に面した灰吹屋は200年以上前から続く薬屋です。創業者 鈴木仁兵衛のあと代々仁兵衛を名乗り、中でも3代目は玉川老人亭宝水という俳号を持つ俳人としても有名でした。

大山道では青山からここまで薬屋が無いえ、「灰吹屋の生薬はよく効く」と評判でとても繁盛したそうです。隣にある土蔵は明治時代に建てられたもので昭和35年までお店として使われていました。



今も残る灰吹屋の蔵

府中道と高幡不動尊

大山道と高津十字路で交わる府中道は、川崎を縦に貫く唯一の道です。北へ進み稲城市で多摩川を渡ると府中へ通じ、多摩川を渡らずにさらに北へ行くと高幡不動尊に通じます。大正7年ころまで高津十字路は三つ角で府中道は今より約100メートルほど西を通っていました。角には石の道標があり「是より北 高幡不動道 南川崎(大師)道 東青山道 西大山道」と刻まれていました。その道標は今大山街道ふるさと館前に移されています。

川崎・登戸・荏田乗合馬車と電車

三つ角だった高津十字路を起点に大正2年乗合馬車が走り始めます。稲毛馬車組合が作られ、溝口~川崎、二子~登戸、二子~荏田の3路線が開設されました。1頭立て8人乗りの馬車が砂利道の大山道をガタガタと走るので、地元の人たちは「ガタクリ馬車」と呼びました。昭和2年には川崎・登戸間に電車が走り、渋谷・二子玉川間の玉川電車も溝口まで延びました。これが今の南武線、田園都市線の始まりです。



上田家で使用した提灯

民権運動と上田家

明治のはじめ立憲政治の実現をめざす自由民権運動が関東各地に広まった時、橋樹部(現在の川崎と横浜の一部)の運動の中心となったのが溝口の上田家です。

上田家は東京に出店を持つ醤油屋で質屋も営む資産家でした。特に県会議員だった7代目忠一郎は当時の有名な民権家たちと親しくして明治14年には橋樹部親睦会を結成するなど、財産をなげうって民権運動に尽くしました。上田家には甥の正次の日記があり当時の様子を伝えています。

宗隆寺と御会式

今から約500年前、溝口に本立寺という天台宗のお寺がありました。住職の興林はある夜「日蓮宗を信じなさい。」という夢のお告げを受けます。同時にこの地の地頭であった階方宗隆も同じ夢を見ました。二人は語り合い天台宗をやめて日蓮宗に変え、寺の名も興林山宗隆寺に改めたと伝えられます。10月21日に宗隆寺で行われる御会式(日蓮上人の法要)には華やかな万燈が街道にくりだしたくさんの人でにぎわいます。またこの寺は人間国宝濱田庄司の菩提寺でもあります。

二子・溝口の問屋跡

江戸時代、二子・溝口は大山道の宿場として両村で継立て(旅人のために人足や馬を用意して置くこと)を負担していました。二子・溝口は1日あたり人足2人馬2頭と決まっており、月の最初の20日を溝口が後の10日を二子が受け持ちました。その人足や人馬を用意する「問屋」だったのが、大石橋のふもとにあった丸屋・鈴木七右衛門家です。丸屋の本業は藁野のたばこや厚木の麦などを扱う問屋で、名主をつとめるかわら、そうした村のしごとをしていました。

庚申塔と神奈川道・片町の市

片町の四つ角には江戸時代の道標をかねた庚申塔が残っています。これには「西大山道 東江戸道 南加奈川道」と刻まれ、ここが溝口から横浜へ向かう道の入口だったことがわかります。昔は60日に一度めぐってくる庚申の夜、人の体の中に住む3匹の虫が、寝ている間にその人の悪事を天の神に告げ口すると信じられていました。だから人の悪事を「見ない・言わない・聞かない」ように三猿を彫った庚申塔を建てておがんだのです。



大石橋のあたりから片町までは水に恵まれぬ地域で、昔は飲み水にも苦労しました。そのため井戸組合を作り共同で二ヶ領用水と久本に親井戸を掘り、そこから竹や木の管を通して大きな桶を埋めた子井戸まで水を引いていました。各家はそこから水をくんだそうです。やがて水道を作ることになり、島崎清次郎が中心となって溝口簡易水道組合を作ります。そして昭和6年には簡易水道が完成しました。溝口神社には井戸組合が祭った水神宮のほくらと昭和10年に建てられた簡易水道記念碑があります。

二ヶ領用水と久地堰・分量樋(円筒分水)

二ヶ領用水は中野島と宿河原から引いた水が合流して本流となり、久地の分量樋で溝口、小杉、根方、川崎堀の4つに分かれます。分量樋では水田面積に応じて水を分けていました。昭和16年新平瀬川の誕生によって現在の地に新しいコンクリート製の円筒分水ができました。



円筒分水



大山道と府中道の交差点にあった道標



片町の庚申塔

また昔はここで12月28日・29日と1月28日・29日に市が開かれました。「片町の市」「百姓の市」といわれ、正月用品やざる、神棚のお宮、だるま、熊手、青負いかご、すきぐわなどが売られ、近くの村から野菜を売りにきて買い物をして帰りました。

ねもじり坂と笹の原の子育て地蔵

片町から街道を大山方面へ進んでいくとねもじり坂になります。江戸時代相模川のアユを運ぶ船がたつぎは溝口の亀屋を入足の中継所としていました。大山道を夜中に走ってきた船がたつぎ夫は、朝方ねもじり坂にさしかかると歌を歌って亀屋に合図を送り、近所の人たちはこの歌が聞こえると朝のしたくをはじめたそうです。笹の原の子育て地蔵は、むかし、こどものなかった人が四国88か所めぐりをして子どもをさすかり、そのお礼に建てたお地蔵様だといわれ、付近の末長と下作延の人たちがおまつりにしています。酉年の4月24日には多くの人がお参りにきます。



笹の原の子育て地蔵

年代	時代	日本のできごと	大山道周辺のできごと
紀元前 1万年前 5千年前 3千年前	縄文時代	縄文式土器が作られる 貝塚が盛んに作られる	海岸線が溝口周辺にまで入りこんでくる 新作、久本、末長に集落ができる
200年前 紀元後 239年	弥生時代	弥生式土器の製作、稲作、鉄器の使用が始まる 女王卑弥呼が魏（中国）に使いを送る 近畿地方に古墳が作られる	下作延稲荷塚古墳などが築かれる
710年 794年 1192年 1338年 1496年 1590年	和銅3 延暦13 建久3 暦応元 明応5 天正18	奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	平城京に都をうつす 平安京に都をうつす 鎌倉幕府成立 室町幕府成立 宗隆寺が日蓮宗に改宗する 秀吉、作延郷に兵士の乱暴・狼藉を禁止する禁制を下す
1603年 1611年 1615年 1641年 1669年	慶長8 慶長16 元和元 寛永18 寛文9	江戸時代	江戸幕府成立 大阪夏の陣、豊臣氏滅亡 二ヶ領用水完成 二子村ができる 二子村・溝口村が矢倉沢往還の宿に指定される 二ヶ領用水の分量樋が作られる 灰吹屋が薬屋を始める 溝口で醤油作りが盛んになる
1724年 1770頃 1782年	享保9 明和 天明2		天明の大飢饉
1806年 1867年	文化3 慶応3		片町の庚申塔が作られる この頃二子で酒作りが盛んになる
1868年 1874年 1879年	明治元 // 7 // 12	明治時代	光明寺に二子学舎がおかれる 第1回神奈川県議会議員選挙で橋樹郡から溝口村の上田忠一郎が選ばれる
1889年	// 22		大日本帝国憲法発布 二子・溝口・坂戸・北見方・諏訪・久地・下作延・久本村が合併して高津村となる
1894年	// 27		日清戦争始まる

年代	時代	日本のできごと	大山道周辺のできごと
1897年	明治30		国木田独歩が溝口を訪れ、「忘れ得ぬ人々」を書く
1904年 1911年	// 37 // 44	日露戦争始まる	溝口でナシ・モモの栽培がさかんになる タナカヤ呉服店蔵造完成 高津村に電灯がつく 溝口川崎間に乗合馬車が開通する
1913年	大正2	大正時代	溝口川崎間にバスが走る 多摩川砂利鉄道が南武線となる
1919年 1921年	// 8 // 10		関東大震災
1923年 1924年 1925年 1927年 1931年	// 12 // 13 // 14 昭和2 // 6	昭和時代	川崎市ができる 多摩川に二子橋がかかる 玉川電気鉄道が溝口まで乗り入れる 溝口に水道組合の簡易水道が完成する 高津町が川崎市に編入 円筒分水ができる 大井町線が溝口まで乗入
1937年 1941年 1943年 1945年 1955年	// 12 // 16 // 18 // 20 // 30		太平洋戦争始まる 東京大空襲、終戦
1962年	// 37		溝口出身の陶芸家濱田庄司第一回人間国宝に指定される 岡本かの子文学碑が二子神社境内に完成
1964年	// 39	東海道新幹線開通、東京オリンピック	
1966年	// 41		田園都市線が長津田駅までのびる
1972年	// 47		川崎市が政令指定都市になる 高津区誕生、第1回高津区民祭開催 新二子橋開通
1974年 1978年	// 49 // 53	新東京国際空港（成田空港）開港	
1982年 1984年	// 57 // 59		高津区から宮前区分区 田園都市線がつきみの駅から中央林間までのびる 大山街道ふるさと館ができる
1992年 1995年 1997年 2002年	平成4 // 7 // 9 // 14	平成時代	阪神・淡路大震災
2004年	// 16		溝口駅前再開発完成 国木田独歩碑亀屋前から高津図書館前に移設される 第1回大山街道フェスタ開催